

## 和田先生との出会い

大 島 稔

和田先生は、1970年から1997年まで27年間にわたり小樽商大に勤められ、昨年3月に定年をもって退官されました。小樽商大での長年にわたる研究と教育への貢献に感謝の意を表したいと思います。

私は、本学の学生として5年間、本学の教員として16年間和田先生と同じ大学ですごしたことになります。和田先生は一般教育等所属で、私は言語センター所属で、互いに所属学科は違うのですが、北方諸民族研究という学問分野が共通していることから先生の名誉教授記念号で饒の言葉とお礼を述べさせていただく機会を与えられました。

思い起こしますと先生とは何度かご一緒に仕事をする機会がありました。最初の機会は、先生の編著『人間行動の諸相』を教科書に使った心理学の授業をとったあとで、私が大学3年生の時のことです。1973～1974年にかけて小樽商科大学パタゴニア学術調査隊が南米チリ国に派遣されることになり、和田先生はその隊の隊長として、南米大陸の南端に住むマプーチェとティエラ・デル・フェゴのさらに南の島に住むヤーガンの心理人類学に関する現地調査を実施されました。私はそのときに登山隊の隊員として調査隊に参加していました。

一緒にチリ・ワインを飲みながら先生といろいろな話しをしました。先生は博学で、ご専門以外にいろいろと趣味が広くさまざまな話題について一言を持たれている先生という印象でしたが、その印象は私が大学に勤めるようになってからも変わりません。ご一緒した研究会の後の懇親会でも世界各国の酒の話しを聞きましたし、留学先のポーランドから帰った直後にはギリシア正教のアイコンの話しを聞いたこともあります。

チリで一緒にディナー・テーブルを囲んだときに、現地で身につけた私の

スペイン語がブロークンだと評されたことがあります。先生は正規に外国語を身につけておられました。後にポーランド行きが決まったときにもポーランド語のカセット・テープを商大のLLに借りに来ていたのを覚えています。巻末の研究業績を見るとわかりますようにドイツ語からの翻訳書も多数あります。

スポーツマンでもありました。ロマンス・グレイのダンディーな着こなしで、車の後ろには、いつでもテニスができるようにとラケットが積んでありましたし、ボーリングの腕前は皆の認めるところでゼミの学生とも教職員ともよくボーリングをしていました。

和田先生は大学の授業では、心理学と産業心理学を講じていましたが、ご専門の研究は、心理人類学で、特に民間療法を含む医療人類学やシャーマニズムの研究では国際的に活躍した研究者でした。先述の南米におけるマプーチェについてもシャーマニズムを研究しましたが、やはり中心は北方諸民族のシャーマニズム研究でした。アイヌ、ニブフ(旧名ギリヤーク)、ウイルト(旧名オロッコ)に関する研究があります。

ウイルトに関する研究は、私が大学院で修士論文を書いているときでしたのでよく覚えています。私の指導教官であった北大の池上二良先生と津曲敏郎先生(現北大文学部教授)、故黒田信一郎先生とともに網走に在住するウイルトの人たちのもとを訪れ現地での聞き取り調査を実施していました。

アイヌの、特に樺太アイヌの研究については、医学博士で樺太豊原市(現ユジノサハリンスク市)で樺太庁立病院耳鼻科医長をしていた御父上の和田文治郎氏の仕事を継承・発展させたと言ってもよいのかもしれませんが。和田文治郎氏は、南樺太全域でアイヌの言語および民俗の調査を行い、知里真志保の名著『分類アイヌ語辞典』の特に人体、病名、薬用植物名について多大な寄与をしたことで有名な樺太アイヌ民俗の研究者でもあります。

二度目に一緒に仕事をしたのは、1985年の「B. ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化国際シンポジウム」のときでした。プロニスワフ・ピウスツキは、1887年ロシア皇帝暗殺計画に連座した罪で15年間の樺太流刑に処されましたが、

流刑地の樺太に原住するニブフ、ウイльта、アイヌ民族の言語・民俗に関する貴重な資料を収集したことで知られるポーランド人です。

和田先生は、日本の多くの研究者がピウスツキの名を知るはるか以前からピウスツキの研究に注目し、いくつかの論文を翻訳しております。その意味で日本でのピウスツキ研究の開拓者であると言えます。

ピウスツキが残した蠟管を復元して聴取するという研究が組織されて、私もその頃アイヌ民俗調査で北海道各地の古老をたずねて民俗調査をしていました関係でアイヌ語聞き取り班に加わっていました。和田先生は、1984年から一年間ピウスツキ古蠟管ゆかりのポーランドのアダム・ミツキエヴィッチ大学等に在外研究員として留学しておられ、帰国後に国際シンポジウムに参加しました。

和田先生は、その後もピウスツキが縁となったポーランドの研究者とのつながりを持ちつづけています。1987年には、第8回北海道新聞学術文化奨励金の受賞により、アダム・ミツキエヴィッチ大学のイエジ・バニチェロフスキ教授を招聘し、ピウスツキ調査ノートの共同研究を行っていますし、退官の前年の1996年には同大学のアルフレット・マイエヴィッチ教授の留学を受け入れております。その間、1989-1990年と1993年にそれぞれ日本学術振興会、日本国際交流基金の助成により民族古資料の研究のためポーランドに赴いています。

学外においてもさまざまな役職についておられました。1990年よりハンガリーに本部のある国際シーマニズム学会会員、1992年より4年間、国立民族学博物館研究協力者、1996年より現在まで日本民族学会評議員、1993年より北海道大学スラブ研究センター共同研究員を務めておられます。

さらに学外の仕事として1995年から退官まで3年間北海道民族学会の会長を勤めていました。この時に津曲敏郎先生と私が事務局を務めることになりましたので、また一緒に仕事をする機会がありました。

和田先生の学問研究は幼・少年時代をすごした樺太の豊原からすでに始まっていたように思います。1997年度の北海道民族学会で、これまでの研究

を振り返りながら、樺太あるいは北海道で先生が出会った先学の人々の話をしました。小樽商大の最終講義でも、網走のニポポ人形の原型は文治郎氏の持ち帰った樺太アイヌの人形であるなど御父上文治郎氏にまつわる話や豊原の古い地図を出されて、樺太の話をされていました。ピウスツキの名をはじめて知ったのも御父上からであったと言います。和田先生は、若い時代の出会いを一期一会のように後のご自身の研究にあるいは人とのつきあいの上でも大切にされてきたように思います。

退官直前には体調を少し崩され、右手が少し不自由だと言っていました。退官のあとは、自宅で療養しながらこれまでの研究をまとめとおっしゃっていました。小樽商大での27年間にわたる先生の教育と研究生活のほんの一部を振り返ることしかできませんでしたが、先生のこれまでのご苦勞を身にしみて感じた次第です。これからも先生が健康にご自愛されてご活躍されることを祈念致して筆を置きます。